

[09] 九州大学農学部農場研究資料表紙総括等

<https://hdl.handle.net/2324/12564>

出版情報：九州大学農学部農場研究資料. 9, 1987-03. 九州大学農学部附属農場
バージョン：
権利関係：

新 品 種 解 說

温室キュウリ “KUDグリーン”

藤 枝 国 光・太 田 栄・郭 秀 年

キュウリは白いぼ系が全国的に普及し、地方色はなくなり、季節感も失われてしまった。白いぼキュウリは色感に優れ、果皮が薄く、肉質も水々しく、生で食べるには確かにうまい。しかし香りに乏しく、肉質が軟らかすぎて漬物や煮たりいためたりする料理には物足りない。しかも若どりしないと品質が劣り、100g前後で収穫していたが、最近では50g以下の「もろきゅう」での出荷がすすめられている。このため生産者は毎日収穫、最盛期には1日に2回の収穫を強いられることになる。その労力は10a当たり400～500時間にも達している。

欧米では施設栽培のキュウリには英国温室型品種が普及している。最近の品種は雌株に改良され、単為結果性を強化している。したがって受粉を必要とせず、果実はタネなしになり、300～400gまで太らせても品質が低下せず、日持もよい。果皮は薄くて果肉が厚く、香気に富み、スライスすればサラダによく、浅漬や肉料理にしてもうまい。一本のキュウリが多目的に利用できる。

こんなキュウリだと農家は収穫・調製作業が大幅に省力化され、生産性が高められ、最盛期でも週に2日は収穫労働から解放される。農家にも消費者にも喜ばれることになるのではないだろうか。“KUDグリーン”は九大農場がこのようなキュウリ作りをアピールするために、英国系温室キュウリを素材にし、我が国の促成や半促成栽培向きに改良した新品种である。

1. 来歴と性状

1981年に英国温室型品種をオランダ、イギリス、日本から収集し、品種比較試験を行った。この中から草勢が強く、黒葉で節間がつまり、果形のやや短い個体と成長が早く、節間が伸び、果実が長い個体を選抜した。これらはいずれも雌性株であるので硝酸銀処理法で混性化させて採種した。その後代は半促成栽培と抑制栽培で年2回世代を進めたが、終始自根で栽培し、蔓割病圃場抵抗性の淘汰を行った。両者とも比較的固定が早かったのでF₄以降は系統内交配で世代を進め、併せてF₁検定を行った。1985年にほぼ目的に適用組合せをえたので、“KUDグリーン”と命名した。

“KUDグリーン”の適応性は春型キュウリに近い。完全雌性株で単為結果性が強く、施設栽培ではタネなしになる。ただしこの単為結果性は高温期には低下するので、夏作には不向きである。

草勢は強く、大柄の草姿になり、分枝力も強いが、主枝+側枝型の収量構成が望ましく、摘心仕立てには馴染まない。蔓割病にはかなり強く、短期栽培では接ぎ木しなくてもよい。うどんこ病にもかなり強いが、べと病抵抗性は普通である。

果実は写真のような中長果で、鮮緑色を呈し、ブルームをふかず、とげは幼果のうちに落ちてしまう。種腔部が小さく、タネなしになっても空洞にはなりにくい。緻密な肉質で香りがあり、色々な調理でうまく食べられ、成熟キュウリの味が楽しめる。



KUD グリーン

2. 作 型

(1) ハウス抑制栽培

8月上旬播種，9月上旬定植，10月中旬～12月下旬収穫。

(2) 促成栽培

11月上旬播種，12月中旬定植，1月下旬～5月下旬収穫（接ぎ木栽培が望ましい）。

(3) 半促成栽培

1月上旬播種，2月中旬定植，3月下旬～6月下旬収穫（接ぎ木栽培が望ましい）。

3. 栽培上の要点

(1) 土作り，施肥法，温度管理は一般のハウスキュウリに準ずる。

(2) ハウス抑制のような短期作型は，圃場が病害虫でひどく汚染されていないならば自根栽培でもよい。促成や半促成栽培はクロダネカボチャへの接ぎ木が望ましい。

(3) 栽培密度は10a 当たり1,800株を基準とする（160cm 畦，単条植え，株間33cm）。

(4) 主枝を伸ばし，蔓の引きおろしを行うか，また1.8m 支柱の頂端で折るかえし垂れ下げる。側枝は1節で摘心する。

(5) 草勢が強く，大柄な草姿になるので，育苗時から初期生育期にかけては養水分をひかえめに管理する。

キムチトウガラシ

藤 枝 國 光・藤 岡 章次郎・郭 秀 年

韓国ではトウガラシは単に辛味づけだけの香辛料ではない。キムチを始め、多くの料理に大量に用いられ、その辛味と独特のうま味と真紅の彩りで料理の主役を演じ、この国では、乾果はもとより、青果での消費も周年化し、最も重要な野菜となっている。それだけに品種の評価も厳しく、1960年代に細胞質・核遺伝子雄性不稔が在来種で発見され、それを利用したF₁育種法が確立されたのを契機に、品種改良はハイブリッド時代に入っている。そして適応性の分化、多収性、病害抵抗性の付与、辛味、うま味、色調などについて格段と向上してきている。

一般に「キムチトウガラシ」は、“伏見辛”や“札幌太”などに代表される伏見群に近縁の品種と思われる。開張性の草姿で生育期間が長く、果長は10cm内外、果径2cm前後の長果を下垂して付ける。著しい特徴は、辛味を支配するカプサイシンの含有量が“鷹ノ爪”の1/2か、それ以下の中辛または弱辛のものが多いことである。そしてうま味に関係するアスパラギンやアラニンなどのアミノ酸が多く、またグルコースやフラクトースなどの糖も多く含まれていて、いわゆる「味のあるトウガラシ」である。

もちろん、食嗜好の大きく違う我が国で、韓国なみの消費は到底考えられないが、中辛・弱辛で「味のあるトウガラシ」の利用拡大は、食生活を楽しむうえで見直されてよいように思われる。ここに試作結果とその栽培法の要点を紹介する。

1. 試作結果

韓国ソール種苗社より“トップ”“青紅”“トルトリ”“チャンピオン”“真品”を導入し、“辛八房”（野菜試）を対照にして試作試験を行なった。畦幅150cm，2条植，株間40cm（330/a株）とし、黒色マルチを行った。なお、肥料は1a当たり元肥に窒素2kg，りん酸2kg，加里2kg，追肥に窒素1.2kg，加里1.2kgを施した。

収量調査の結果を第1表に示した。赤熟果を7月28日から10月9日まで収穫し、残存未着色果を未熟果として区別し、平均株当たり収量を求めた。第2表には赤熟果（10月1日）の果重と果形指数を示した。

この栽培で、特に草勢が強く、作りやすかったのは“トルトリ”と“チャンピオン”である。“トルトリ”はキムチトウガラシのなかで収穫果数をもっとも多かったが、株当たり重量で

はより大果の“チャンピオン”がまさった。両者ともに豊円な果実で、形がよく整い、赤熟果が美しい。“チャンピオン”は葉色がやや淡いが、“トルトリ”は濃緑色でより強健そうにみえた。なお、辛味は“チャンピオン”より“トルトリ”の方が強いが、“辛八房”にくらべると明らかにマイルドであった。

2. 作 型

トンネル早熟：1月中旬播種，4月上旬定植，6月中旬～10月下旬収穫

早熟（1）：2月中旬播種，5月上旬定植，7月中旬～10月下旬収穫

早熟（2）：3月中旬播種，5月中旬定植，7月下旬～10月下旬収穫

3. 栽培上の要点

1) 箱播きし，本葉3枚期に鉢あげする（12cm ポリ鉢）。

第1表 収量調査 (3月25日播種)

品種名	供試株数	枯死株数	株当たり果実数			株当たり果重 (g)		
			赤熟	未熟	計	赤熟	未熟	計
ト ッ プ	28	2	75.2	42.7	117.9	477	304	782
真 品	28	5	54.3	77.7	132.0	352	545	897
青 紅	28	1	47.1	64.0	111.0	484	838	1,321
トルトリ	28	2	125.9	140.0	265.9	559	726	1,286
チャンピオン	28	1	126.0	85.0	211.0	1,017	687	1,705
辛 八 房	28	0	292.3	79.7	372.0	488	135	622

第2表 果重と果形 (赤熟果)

品種名	果重 (g)	果長 (cm)	果径 (cm)	果長/果径
ト ッ プ	8.2	7.2	2.2	3.3
真 品	4.8	8.1	1.4	5.8
青 紅	8.8	9.6	1.6	5.5
トルトリ	5.3	6.2	1.5	4.3
チャンピオン	6.9	8.9	1.5	6.0
辛 八 房	1.9	3.9	1.2	3.4

- 2) 元肥（1 a 当たり）は窒素2 kg，りん酸2 kg，加里2 kg を基準とする。追肥は窒素1.2kg，加里1.2kg 程度でよい。
- 3) ポリマルチを行う。開花前の苗を畦幅150cm × 2 条植 × 株間40cm（330株/a）に定植する。
- 4) 1.3m の支柱を畦の両側に2 m 間隔に立て，第1 段ネットを50cm，第2 段ネットを80cm 高さに張り，これに誘引する。
- 5) 梅雨あけに，マルチの上から厚めに敷藁をする。
- 6) 青果用は緑熟期または赤熟期，乾果用は完熟期に収穫する。



キムチトウガラシ

上左より：トルトリ，トップ，真品，チャンピオン
下左端：辛八房